大日本帝国内・外における「日本」のイメージ

――ソフト・パワー（soft power）としての『万葉集』――

チトコ＝ヂュープランティス　マウゴジャタ・カロリナ
Małgorzata K. Citko-DuPlantis

一　はじめに

ソフト・パワー（soft power）は、米国の政治学者であるジョセフ・ナイ（Joseph Nye）によって国際政治で知られるようになった。対外的な強制力によらず、共感を得ることにより国々の行動に影響を与え、国家に望ましい結果を得る能力を定義する用語である。ジョセフ・ナイによると、「ソフト・パワーは人々を威圧せずに、人々を取り込む」[1]。国家の文化・政治的価値観、または外交政策の魅力に頼る概念で、軍事力や経済力などといった頻繁に使用されるハード・パワー（hard power）に対置されるものである。近代世界史におけるソフト・パワーの最も有名な例は、アメリカニゼーション（世界各国の政治、経済、社会、文化の各面がアメリカ合衆国のようになる現象）である。または、二〇一二年に「欧州地域の安定および協調路線を図る取り組みを評価して」という理由でノーベル平和賞を受賞した欧州連合や二〇〇〇年代初頭に日本政府によって提唱された「クールジャパン」戦略なども、ソフト・パワーの例である。実際、以前の日本は、「失われた一〇年」のイメージで世界に知られていたが、現在では、世界的に認知されるようになったJ-POP・漫画・アニメ・ビデオゲームによって、日本文化は世界で最も影響力のある文化の一つとなっている[2]。さらに、米国の大学で最も学習されている外国語の中で、日本語への学生の

関心が二〇一三年以降ますます高まってきた。その一方で、他の外国語への関心が低下してきている。[3]

ソフト・パワーは、国際政治における多くの概念と同様に、多様な学者によって批判されている。例えば、ソフト・パワーをハード・パワーの反対としてではなく、ハード・パワーの延長として理解するべきだとジャニス・マターン（Janice Mattern）は示唆している。[4] また、ソフト・パワーが「文化帝国主義」ではなく、文化交流に基づいて使用されるべきだと松田武は主張し、[5] ニーアル・ファガソン（Niall Ferguson）は、国益を達成するにはソフト・パワーは「ソフト」すぎると指摘している。[6] 実際、ソフト・パワーが植民地主義のもう一つのバージョンであり、ポストモダンの文化的植民地主義、または文化主義の一形態であると言えるのではないか。

まるでジョセフ・ナイの論が言い古されたものだとでもいうように、近代化を図った明治政府の国内および国際政策において、ソフト・パワーのような考えは新しいものではなかった。実際、満洲事変[7]後の数年間、米国における日本の美学の促進を通じて米国の世論に影響を与えようと、大日本帝国は様々な試みを行った。ソフト・パワーや文化外交などの例として、米国での日本のイメージアップを目指し、一九三六年九月にボストン美術館で「日本美術品展」が開催された。長い歴史がある洗練された文化としての日本のイメージが描写され、大日本帝国の政府は「適切な知識と情報」（proper knowledge and information）を提供することで、「日本と日本人に関する多くの誤った考え」（many mistaken ideas concerning Japan and the Japanese）[8] を正そうとした。要するに、ナチス・ドイツとファシズム・イタリアと同盟を結んだ大日本帝国は、アジアにおける帝国主義を正当化しようとしたのである。[9] 日本の古典文学も、ソフト・パワーの手段として大日本帝国によって首尾よく利用された。実際、『万葉集』の「国民歌集」としてのイメージは、「日本らしさ」の概念・ブランドとして現在に至るまで機能し続けている。二〇一九年に発表された新元号「令和」も、このような『万葉集』の活用の一例である。さらに一九八一年に、ブラジルで日系ブラジル人によって短歌集『コロニア万葉集』が刊行され、台湾が日本の植民地だった時代からの台湾人の短歌が入る『台湾万葉集』という歌集も一九八一～一九九三年に刊行された（原型となる『花をこぼして』が一九八一年刊）。この二つの歌集は、ソフト・パワーのよい例だ。加えて、日本画家の鈴木靖将は様々な『万葉集』の歌を描き出し、二〇〇〇年代からは外務省の後援を受けて芸術を通じて日本の文化遺産を促進する文化の代表者として世界中の国々を訪問している。ジョセフ・ナイがソフト・パワーを定義するよりもかなり前から、概念・ブランドとしての「『万葉集』」はソフト・パワーとして日本政府によって使用されていたように見える。

二　「日本」やソフト・パワーなどとしての「『万葉集』」という概念・ブランド

『万葉集』以前の日本では、『懐風藻』のような漢詩集が撰された。現存する日本最古の歌集として、『万葉集』は日本文化・思想史の源とされ、早くから国外の日本文学者の多くの関心を呼び、論争を引き起こしてきた。日本文学史においても『万葉集』は何度も創造、そして再創造され、その時々の様々な政治的、文化・歴史的、哲学的、または思想的な目的のために用いられた。また、そうして蓄積された『万葉集』の受容は、『万葉集』の存在と目的を、時の日本社会において位置づける上で重要な役割を果たした。例えば、中世における『万葉集』の流動性は新歴史主義（New Historicism）を代表するルイス・モントローズ（Luis Montrose）の「テキストの歴史性」（historicity of texts）の概念[10]が日本文学へも適用できることを証明する。実際、完成までに多くのバージョンを要した共同歌集で、現在の『万葉集』の定義は以下の通りである――「現存最古の歌集。『万葉集』二十巻が現在みる形にまとめられたのはいつか不明。年代の明らかなもっとも新しい歌は七五九年（天平宝字三）正月の大伴家持の作だから、最終的な編纂はそれ以後となる。」〈日本大百科全書（ニッポニカ）〉。そして、「現存する我が国最古の歌集。七五九年（天平宝字三）以後の成立。何人もの手を経て編まれたものと考えられるが、現在の形に近いものにまとめたのは大伴家持かと言われている。長歌・短歌・旋頭歌が主で、二十巻に約四千五百首を収める。」〈全文全訳古語辞典〉。その上、現在『万葉集』は勅撰集ではなく、私家集と定義される。

中世日本においては、『万葉集』が文化資本として機能し、多様な歌人たちに政治的および物質的な支援をもたらす契機となった。また、賀茂真淵のような江戸時代の国学者たちが儒教・仏教などの外来思想を排し、日本の古典を文献学的に研究する中で、日本の固有の文化・思想を究明しようとした結果、『万葉集』は古人の心の象徴となった。しかし、『万葉集』の研究が盛んになったのは、大日本帝国が日本とそのイメージを国民国家とグローバル・システムの一部として構築しようとした明治時代だった。歴史的に庶民から隔離されていた貴族階級以外によって生み出された日本文化的または日本文学的な作品を見つけるのは難しかった。そして、『万葉集』は、勅撰集とみなされていた中世とは対照的に、私家集として定義されるようになったため、国民を強調した大日本帝国の「国民文学」の概念に適合した。天皇・皇后と皇族・貴族はもちろん、階層的に低い一般民衆の歌まで含んでいるために、古人の心と意欲などに触れることができる『万葉集』を日本の国民全体を代表するものとすることが大日本帝国政府の態度だった。品田悦一によると、『万葉集』は一八八〇年代以降、明治期の知識人によって称賛された[11]。また、正岡子規は『古今和歌集』を否定して『万葉集』を高く評価し、江戸時代までの形式にとらわれた和歌を

非難しつつ、短歌の革新につとめた。

国民国家に通ずる国民文学としての『万葉集』のイメージは、正岡子規に強い影響を与えた。子規は根岸短歌会という短歌結社を主催し、伊藤左千夫などとともに活躍した。品田悦一が指摘するように、伊藤左千夫は近代日本における『万葉集』の重要性と文化遺産としての意義を以下のように述べている――「日本人たるものは、如何なる種類の人と雖も、必ず万葉集を知らざるべからざるなり、（中略）一国の人民として自国の文学を知らず、自国思想の根源を知らざるは、其国民たるの資格なきものなり」[12]。正岡子規没後（一九〇三～一九〇八年）、『万葉集』を作歌上の手本として写実的歌風を推進した伊藤左千夫などの根岸短歌会の歌人たちによってアララギ派が結成され、短歌雑誌『アララギ』が刊行された。一九一三年に伊藤左千夫が亡くなった後、歌人・島木赤彦が雑誌の編集発行を行なうようになった。赤彦は、『万葉集』を以下のように説明した――「凡ての階級のものが、この時代の現実の問題に正面から向き合つて、一様に緊張した心を以て歌つてゐるといふのが第一の特徴であります。」[13]このような伊藤左千夫と島木赤彦の「国民歌集」としての『万葉集』という見解は、日本帝国主義の興隆にとって重要な言説であった。

その間、歌人で日本古典研究者でもあった佐佐木信綱は一九一二年に『万葉集』の校訂を文部省に委託され、『西本願寺本万葉集』を最も信頼に足る正統な写本として位置付け、さらに一部の天皇皇族に和歌と『万葉集』について講じた。[14]また、『万葉集』は、軍によって認められていた推薦書だったため、一九二七年に刊行された『新訓万葉集』（佐佐木信綱編）は出征兵が携帯する書物の代表となった。[15]そして、大日本帝国の後援を受けた『西本願寺本万葉集』は、正統な写本とされたため、一九三〇年代以降、『万葉集』のほとんどの校本・注釈本・翻訳において、底本とされた。

佐佐木信綱のみならず、正岡子規・伊藤左千夫・島木赤彦の歌人たちなどの活躍と努力で、『万葉集』は日本国内・外の多くの世代の知識人によって読まれ高く評価された。こうして、明治期に「国民歌集」として再発明された『万葉集』がもたらした重要な影響の一例に、ブラジルで刊行された『コロニア万葉集』という短歌集がある。一九七〇年代前半、移民七〇周年（一九七八年）が意識され、『コロニア万葉集』の構想が始まった。一九八一年に刊行され、収録作者数一、三七八人（戦前二六九、戦後一、一〇九）、作品数六、六三四首（戦前九九一、戦後五、六三四）の歌集である。[16]

明治維新以降、生活に困窮した明治期の農民たちは、より良い生活条件を求め世界の国々へ移住しはじめた。ブラジルにおけるコーヒー生産には、元々は主に奴隷たちによって労働力がまかなわれていたが、一八八八年に同国の奴隷制度が廃止され、コーヒー農園主たちは多様な国々の移民を雇用し労働力を充足するようになった。一九〇七年に、日米紳士協約[17]によって米国

への日本人の移民は禁止され、一九〇八年にブラジルへの正式移民が開始された[18]。ゼリデス・マリア・リバス（Zelideth María Rivas）によると、日系ブラジル人が部分的に短歌を古語で詠んだのは、古語が近代日本からの「言語的離脱」を意味したためだった[19]。しかし、日系ブラジル人が日本語で歌を詠んだのは、短歌は古来より日本の象徴であると考え、親しい言語と文化を移民として維持しようとしたためという可能性が高いのではないだろうか[20]。要するに、歌は「日本」を意味するものだった。白石佳和によると、一九〇八年の最初の移民船笠戸丸来航以前から短歌の作歌が開始されたが、一九二〇年代に『伯剌西爾時報』、『日伯新聞』、『聖州新報』などの日本語新聞が刊行されてから短歌会は盛んになった[21]。一九七〇年代後半に、日本語が話せる日系ブラジル人のコミュニティは高齢化し減少していたため、移民文学である歌集を編集するのは決して珍しいことではなかった。ただ、なぜ『コロニア万葉集』の名が冠せられたのか。

「コロニア」というのは、日系ブラジル人を指す普遍的な表現である[22]。「コロニア短歌の父」と頻繁に呼ばれる岩波菊治は、アララギ派の島木赤彦の直弟子でもあり、『万葉集』の学習者でもあり、ブラジルにおけるアララギ派を代表した[23]。岩波菊治の影響を受けた武本由夫は、『コロニア万葉集』に入る「コロニア短歌略史」を書いた。こうした関係性を考慮した時、『コロニア万葉集』は、大日本帝国によって「国民歌集」としての『万葉集』のイメージが安定化された結果と、アララギ派が近代日本の歌人たちに与えた影響によって、『万葉集』が日本国外においても「日本」の類義語となったことを証明していると言えまいか。細川周平も指摘しているように、ブラジルにおける短歌が「孤立した日本語環境のなかで、経済的見返りなしに一世紀以上も」書かれ続けてきた文学であることも見逃せない[24]。したがって、ジョセフ・ナイのソフト・パワーの定義に従えば、『コロニア万葉集』は大日本帝国が強制力によらず望ましい結果を得たという証明と言える。「国民歌集」としての『万葉集』のイメージが構築され、国外に広まった。『万葉集』が「和歌」と「日本」の概念・ブランドであることは、コロニア万葉集刊行委員会の人々によって明確に認識されていた。

ソフト・パワーとしての「『万葉集』」という概念・ブランドの影響力を提示するもう一つの例は、より政治的圧力の強い状況で編集された『台湾万葉集』と題された歌集である。移民文学の産物である『コロニア万葉集』と比べると、『台湾万葉集』の編集の背景と過程は大きく異なる。『台湾万葉集』の編集は、大日本帝国による台湾の植民地化の予想外の結果であり、第二次世界大戦後の中華民国（一九一二～一九四九年）への編入に対する台湾の抵抗とも多様な政治的関係を有していた。台湾では『あらたま』などを通じて戦前からもアララギ派は活動していたが、概念・ブランドとしての「『万葉集』」の普及に貢献した要因は他にもある。

日清戦争（一八八四～一八九五年）の結果、下関条約によって、台湾が清朝から大日本帝国に割譲された。大日本帝国の初の植民地であり、「モデル」植民地として、台湾の経済と産業を改善するために多大な努力が払われた。そして、一九三七年から台湾の「皇民化」（Japanization, imperialization）も始まり、実際に日本語普及政策、日本式姓名への改名、台湾人の日本軍への徴兵などが行われた[25]。台湾人が短歌や『万葉集』などに接したのは、皇民化教育の影響からであった。犬養孝を含む多くの日本人は、大日本帝国が台湾で日本語、日本文学、日本文化を促進することを支援した。大日本帝国の文化的植民化の証拠といえよう。

一九二二年に台北で設立された旧制台北高等学校は、外地では初の高等学校であり、一九四二年からその教員になったのは犬養孝だった。『万葉集』に興味があり、台湾人の学生に短歌と『万葉集』を教えた。実際、『台湾万葉集』の編著者である呉建堂（筆名：孤蓬万里）は、犬養孝の学生であった。犬養は国語のクラスの全てを『万葉集』に当て、教科書には、恩師であった上田英夫校注の『万葉集精選』が使われた[26]。日本の降伏後には、犬養は帰国し、一九六二年に東京大学より文学博士の学位を取得した。大阪大学名誉教授・甲南女子大学名誉教授となり、一九七九年に昭和天皇が明日香に行幸し、甘樫丘にて明日香の歴史的風土を視察したときの案内役をつとめ、一九八七年に文化功労者となった。万葉遺跡の保存運動をすすめ、万葉旅行を企画するなど『万葉集』の普及につとめた。一方、第二次世界大戦後の台湾では、日本語と日本文学が戦後の政治によって抑圧された。

日本の武装解除に伴い一九四五年に中華民国の領土に編入された台湾は、中国国民党と中国共産党の間の政治的対立・闘争に巻き込まれた[27]。この闘争は、世界史において「国共内戦」として記録され、一九四九年に中国国民党が台湾へ放逐され、中国共産党が中華人民共和国を成立させることで終わった。事実上、金門砲戦（一九五八年）[28]後に台湾の政治情勢が安定する一九六〇年代まで、台湾では日本文学は抑圧され周縁化された。一九六〇年代末に、台北短歌研究会が呉建堂を中心に結成され、一九六八年に雑誌『台北歌壇』が創刊された。多くの短歌は、共産主義政権への抵抗を表明し、「独裁の不正」に抗議するものだった。ディーン・アンソニー・ブリンク（Dean Anthony Brink）によると、多くの短歌に見られるこうした「闘志」は、協会の精神に基づくものであり、また協会はその精神を『万葉集』の歌に起源するものとしている[29]。台北短歌研究会は、現在まで活動を続け平均年齢九〇歳を超える会員の短歌を雑誌『台湾歌壇』で刊行し続けている。

『台湾万葉集　上巻』が一九八一年に台湾で刊行されたのは、何かを記念してではなく、高齢化によって、複雑な植民地時代に由来するアイデンティティの一部を失っていたコミュニティで、日本語と日本文化を保護するためだった[30]。『台湾万葉集』

の刊行は、日本の文化と歌への懐かしさを含む、台湾の植民地時代の遺産への回帰を可能にした政治情勢の改善により果たされた。一九九四年に、『台湾万葉集』は日本でも刊行され話題にもなった。そして、『台湾万葉集』は一九九六年に菊池寛賞を受賞し、呉建堂は台湾人として日本の文学賞を獲得した第一号となった。河路由佳が強調するように、『台湾万葉集』は必ずしも古代の『万葉集』に直接かかわるものではない[31]。『台湾万葉集』の名が冠せられたのは、編集者の呉建堂が『万葉集』の歌を強調した犬養孝のもとで和歌の訓練を受けたためだ。ポストコロニアルの現代の世界において、呉建堂と『台湾万葉集』の事例は、台湾に強い影響を与えた大日本帝国のソフト・パワーの一例である。概念・ブランドとしての「『万葉集』」の効果的な適用の成果であり、『万葉集』が「日本」と日本人のアイデンティティーを指すことの証明でもある。その上、呉建堂が歌を通して日本文化に触れたことにより、彼の持つ「日本」のイメージはポジティブなものであったため、『台湾万葉集』と題された。孫世偉が指摘するように、台湾における「万葉教育」は短かったがインパクトは強いものであった[32]。

犬養孝のような高名な学者らが、台湾を含めたアジア諸国に対して大日本帝国が行った植民地化と皇民化の活動を支援したことは、第二次世界大戦後の日本では強調されていない。このような活動は、文化的な「日本」というイメージの構築に大きく貢献したため、戦後の日本ではあまり否定的に語られていないのである。そして、その「日本」のイメージは、日本政府に現在でも利用され続けている。さらに、戦後に犬養孝のイメージも「ソフト」なものに変えられ、様々な辞典に見られる彼の紹介文には台湾で国語教師として活動したことについての情報は少ない[33]。大日本帝国の非公式文化大使のような立場から、植民地時代の台湾で『万葉集』と和歌の知識の伝達者としての犬養孝の役割は、洗練された国としての戦後の日本のイメージを構築するのに有用なツールであった。そして、大日本帝国の戦争中の非人道的活動と現代における問題を孕んだイメージにもかかわらず、植民地領土で文化的影響を与える「日本」のイメージは首尾よく生み出された。

『コロニア万葉集』と『台湾万葉集』はどちらも、日本文学とは必ずしも認識されず、日本でも広く研究されてはいないが、多様な社会的地位や国籍の人々を統合する、大日本帝国の「国民歌集」としての『万葉集』の構築の延長に外ならない。ソフト・パワーとして活用された日本文学と文化は、大日本帝国内外の多くの領土に植え付けられ、日本人のアイデンティティも構築した。正岡子規とアララギ派、あるいは佐佐木信綱や犬養孝のような学者が、『万葉集』もこのプロセスの一端を担ったのであった。さらに、『コロニア万葉集』と『台湾万葉集』は、概念・ブランドとしての「『万葉集』」――日本のアイデンティティと伝統の象徴――が、日本の降伏後にも、同様に存在し続けていることの証明である。

大日本帝国に関係があるにもかかわらず、ソフト・パワーとしての「『万葉集』」という概念・ブランドは日本国内でも海外でも使用され続けている。その一例は、日本画家である鈴木靖将だ。『万葉集』を題材とした絵を描き、世界の国々（中国、フランス、ドイツ、セネガル、韓国、米国）で展覧会を開催し、日本の伝統・文化遺産を広めてきた。さらに、画家としての活動だけではなく、様々な大学（ハワイ大学[34]やシカゴ大学など）や国際連合教育科学文化機関などの世界的に知名度のある組織でも度々講演を行っている。これらを含めた彼の国際的な活動は数年にわたり外務省によって後援されたのだが、『万葉集』にフォーカスを当てた彼の芸術活動が、日本政府のソフト・パワーを代表する形をとったのである。植民地化の歴史の一部でも、日本語と日本人のアイデンティティを維持するためでもないが、鈴木靖将は日本政府の要請により世界中で「『万葉集』」という概念・ブランドを宣伝してきた。

日本の平和的・感傷的理想化を促進するための「国民歌集」という、ソフト・パワーの手段として想像された『万葉集』のイメージは、現在も存在している。『万葉集』を〝典拠〟とする新元号「令和」は、近現代の日本が自らの過去といかに関係しているかを示唆し、『万葉集』を通じていかに自らを定義しようとしているかを明示する一例である。実際、この一〇～一五年間、日本における『万葉集』のイメージを考慮すると、『万葉集』に関係がある新元号の登場は驚くほどのことでもない。フォンリュブケ留奈子が指摘したように、若者に『万葉集』を周知させ、日本文化の源としての価値を強調するために、二〇〇九年前後（『万葉集』成立一二五〇周年記念事業として）に多様なイベントと取り組みが行われた。例えば、ＪＲ東海では「ココロ・ニ・マド・ヲ　万葉集」という公式ウェブサイトが設立され、二〇〇八年にはＮＨＫの「日めくり万葉集」という番組が万葉歌の新しい解釈を毎週提供した。その上、著名な万葉研究者は「万葉のこころを未来へ」の実行委員会を結成し、諸都市で『万葉集』に関するシンポジウムや講演が開催され、一般公募で集められた短歌一、〇〇〇首が『平成万葉集』として二〇〇九年に刊行された[35]。

自由民主党の政治家・安倍晋三は、二〇〇六年に刊行され大ヒットした『美しい国へ』で未来の日本のビジョンを提唱した。「平和憲法」改正や国民意識を啓発するための教育改革なども発表し、一部の国際評論家によって軍国主義への回帰として問題視された[36]。当時の首相・安倍晋三は新元号「令和」が発表された後で、以下のように話した――「万葉集は我が国の国民文化を象徴する国書である。しかも階層にとらわれない、幅広い人々の和歌が収められている。これからは若い人々に活躍してもらいたい。そうした新時代に相応しい元号である[37]」。村田右富実が指摘するように、二一世紀に元号を使用している国は日本だけであり、「元号は政治の産物だが、それを取り込んでしまう文化も力強い[38]」。このように、日本社会の多様な声を集め

た包括的な「国民歌集」という大日本帝国がかつて利用したレトリックを模倣することによって、『万葉集』は新元号に表される新たな時代の「日本らしさ」の象徴となった。無論、新元号「令和」の発表によって、学者・芸術家・作家の中で万葉集研究のさらなるブームが起こった。その上、若い世代をターゲットとした様々な形式の大衆文化も生み出されている。このようなソフト・パワーとしての「『万葉集』」という概念・ブランドの多様な活用と展開がなされたのは、帝国主義的な感情を抜きにした『万葉集』の再発見と保存のためであり、日本人のアイデンティティの源であることを再び記憶に刻むためでもある。新元号「令和」の発表で構築された『万葉集』のイメージは、日本人論に受け継がれ続けるという意見もある。(39)

三　おわりに

近代日本における『万葉集』のイメージは、日本が自らの過去に影響を受け続けることと日本最古の歌集への回帰を通して自らの文化を再発見・再定義し続けることを示している。『万葉集』は近代の歌集ではないが、あらゆる世代の多様な古典文学研究者のおかげで一般大衆がアクセスできるようになっている。『万葉集』は頻繁に、難しい・分かりにくい・曖昧な文学とみなされ、「クールジャパン」戦略の一部でもなかったが、「『万葉集』」という概念・ブランドは近代の想像物「日本」と日本人のアイデンティティの永遠の象徴として機能し続けている。その理由は、『万葉集』の「ソフトな」イメージが逆説的に国際関係でハード・パワーを頻繁に使用した大日本帝国によって構築され、ソフト・パワーとして巧みに利用されてきたためである。従って、多様な世代の知識人・政治家によっていかに理解されようとも、「『万葉集』の心」はいつの時も「日本の心」を意味してきた。

二〇世紀初頭に、大日本帝国が「日本」を象徴する概念・ブランドとしての「『万葉集』」を創造したため、その概念・ブランドは、時代や政治体制を超え日本人・日本人以外によって、世界の国々で日本人のアイデンティティを表すために使用されてきた。以上にあげた多数の例は、『万葉集』の写本史には関係ないが、中世以降の諸写本が示す『万葉集』という歌集よりも広い概念である「『万葉集』」というブランドの結果である。「『万葉集』」が「日本」の象徴である理由は、『万葉集』が日本語の歌集として中国文化との分離を象徴し、和歌の権威も裏付けたためである。中世の万葉学者であった仙覚の写本と注釈から始まった『万葉集』の安定化とカノン化は、何世代にもわたる日本の知識人が使用できる安定化された言説の創造の可能性を示した。こうした長いカノン化の歴史を経て、「『万葉集』」は、どの時代でも役に立つ、「日本」を文化的に象徴する安定化された概念・ブランドとして、自らを再定義するための大日本帝国の戦略としても、またはアジア諸国の皇民化政策・文化的植民地主義・手段としても、さらには村田右富実によって「「令」

には確かに命令の意はあるが、ここは（中略）「美しい」とか「良い」の意となる[40]」と説明された新元号「令和」としても利用され続けているのである。

注

（1）Joseph Nye, *Soft Power. The Means to Succeed in World Politics*（Public Affairs, 2004）, 5.

（2）クリスティン・R. ヤノ（Christine R. Yano）によると、クールジャパンは「大陸と海にまたがる若者文化の市場取引で世界通貨を提供する」。Christine R. Yano, “Wink on Pink : Interpreting Japanese Cute as It Grabs the Global Headlines,” *Journal of Asian Studies* 68, no. 3（2009）: 684.

（3）Colleen Flaherty, “L’œuf ou la Poule?,” *Inside Higher Ed*, March 19, 2018 :〈https://www.insidehighered.com/news/2018/03/19/mla-data-enrollments-show-foreign-language-study-decline〉。

（4）Janice Bially Mattern, “Why ‘Soft Power’ Isn’t So Soft : Representational Force and the Sociolinguistic Construction of Attraction in World Politics,” *Millenium – Journal of International Studies* 33（2005）.

（5）松田武『対米依存の起源―アメリカのソフト・パワー戦略』岩波書店、二〇〇五年。

（6）Niall Ferguson, “Think Again : Power,” *Foreign Policy*, November 3, 2009 :〈https://foreignpolicy.com/2009/11/03/think-again-power/〉。

（7）一九三一年九月一八日に中華民国奉天（現瀋陽）郊外の柳条湖で、関東軍がポーツマス条約により大日本帝国に譲渡された南満洲鉄道の線路を爆破した事件（柳条湖事件）に端を発し、関東軍による満洲（中国東北部）全土の占領を経て、一九三三年五月三一日の塘沽協定成立に至る、日本と中華民国との間の武力紛争（事変）のこと（〈日本大百科全書（ニッポニカ）〉による）。

（8）Inō Dan, “Broadening Cultural Contacts,” *KBS Quarterly* 1（Jan.–March 1936）: 2–3.

（9）John Gripentrog, “Power and Culture : Japan’s Cultural Diplomacy in the United States, 1934–1940,” *Pacific Historical Review* 84, no. 4（2015）: 500, 515.

（10）Louis Montrose, “The Poetics and Politics of Culture,” *The New Historicism*（Routledge, 1989）, 15–24.

（11）品田悦一『万葉集の発明』新曜社、二〇〇一年、60–70頁。Shinada Yoshikazu, “Man’yōshū : The Invention of a National Poetry Anthology.” *Inventing the Classics. Modernity, National Identity, and Japanese Literature*, Haruo Shirane and Tomi Suzuki, eds.（Stanford University Press, 2000）, 33–34.

（12）伊藤左千夫「万葉集道解緒言」『左千夫歌論集　第一』岩波書店、一九二九年、129頁。

(13) 島木赤彦「万葉集の系統」『歌道小見』、『赤彦全集』第三巻、岩波書店、343頁。

(14) 見尾久美恵「佐佐木信綱の万葉学―『西本願寺本万葉集』印行に関する正宗敦夫宛書簡を通して」『書簡研究』第5号、一九九三年、85–86頁。Haruo Shirane and Tomi Suzuki, eds., *op. cit.* 1–27, 48–49.

(15) フォンリュブケ留奈子「『万葉集』に見られる大正・昭和初期の日本人論」『アルザス日欧知的交流事業日本研究セミナー「大正〈戦前」報告書』、二〇一四年、5–6頁。

(16) コロニア万葉集刊行委員会編集・発行『コロニア万葉集』、一九八一年、323–330頁。

(17) 日本が自国民の米国への移住を制限するという内容の非公式の協定。アメリカのハワイ属領制実施（一九〇〇年）以後激増した日本人移民排斥問題をめぐって日米関係が緊張し、アメリカは、国内での厳重な移民制限法制定の動きを抑えるため日本による自主的渡航制限実施の必要性を説いた。かくて一九〇七年一一月から翌年二月の間に日米間で七通の書簡・覚書が交換され、日本側は、再渡航者、在米移民の両親と妻子、学生、商人を除く新規移民をすべて自主的に禁止した（〈日本大百科全書（ニッポニカ）〉による）。

(18) 日本は、一八九五年に初めてブラジルと外交関係を樹立した。一九四一年の真珠湾攻撃の際に日伯国交は断絶されたが、一九五二年に回復した。ブラジルは世界最大の日系人居住地であり、現在約200万人以上の日系人が住む。〈外務省：https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/brazil/data.html#section3〉。

(19) Zelideth María Rivas, "Songs from the Land of Eternal Summer : Beyond Duality in Japanese Brazilian Publication and Colonia Man'yōshū," *Comparative Literature Studies* 52, no. 4 (2015) : 806–807.

(20) 第二次世界大戦時、連合国側であったブラジルは国内で日本語を禁止し、日本語の新聞雑誌類も発禁となった。日本語を話した日本人が逮捕・国外追放される事件も頻発し、迫害と拷問の事件もあった。Jonathan Watts, "Brazil's Japanese community gets apology for abuse," *The Guardian*, October 13, 2013 : 〈https://www.theguardian.com/world/2013/oct/11/brazil-japanese-community-apology-abuse〉。

(21) 白石佳和「『コロニア万葉集』と『台湾万葉集』から照射するPerformance Literatureの可能性」『高岡法科大学紀要』第31号、二〇二〇年、57頁。

(22) コロニア万葉集刊行委員会編注（16）書、326頁。

(23) 岩波菊治は、一九一八年にアララギに入会し、一九二五年にブラジルに渡った。阿尾時男「海外日系人文学の研究―ブラジル日系人の短歌」『奈良産業大学紀要』第19集、二〇〇三年、19–20頁。

(24) 細川周平『日系ブラジル移民文学Ⅰ』みすず書房、二〇一二年、3頁。

(25) 約二〇万人余りの台湾人日本兵が日本軍で兵役に服した。〈https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_shitsumona.nsf/html/shitsumon/a084015.htm〉。

(26) 河路由佳「日本統治下の台湾における〈万葉集〉教育と〈台湾万葉集〉の誕生——呉建堂と伴走者としての犬養孝——」『戦争と萬葉集』創刊号、二〇一八年、22頁。

(27) 中国国民党と中国共産党の間の政治対立は、一九二七年に始まった。

(28) 中華民国福建省金門島に対し、中華人民共和国の中国人民解放軍が同島に侵攻すべく砲撃を行ったことにより起きた戦闘である。台湾では八二三砲戦と称している。また第二次台湾海峡危機と称されることもある。

(29) Dean Anthony Brink, *Japanese Poetry and Its Publics. From Colonial Taiwan to Fukushima* (Taylor & Francis Group, 2019), 110–114.

(30) 白石注（21）論文、59頁。

(31) 河路注（26）論文、21頁。

(32) 孫世偉「日本統治下台湾の国語教科書における『万葉集』記述について——昭和十二年以降の第四期並びに第五期教科書を中心に」『戦争と萬葉集』創刊号、二〇一八年、44頁。

(33) 〈日本国語大辞典〉、〈日本人名大辞典〉など。

(34) 二〇〇六年にハワイ大学の図書館で催された展覧会：〈https://manoa.hawaii.edu/library/about/news-events/exhibits/manyo-exhibit-new-leaves-from-the-manyoshu-exhibit-of-paintings-and-ceramicsby-yasumasa-suzuki-and-seiran-suzuki/〉。

(35) フォンリュブケ注（15）論文、1–2頁。

(36) 安倍晋三『美しい国へ』文春新書、文藝春秋、二〇〇六年。Michal Kolmas, *National Identity and Japanese Revisionism: Abe Shinzo's Vision of a Beautiful Japan and Its Limits* (Routledge, 2019).

(37) 「新たな天皇誕生に伴う新しい元号「令和」が一日、制定された」『北面武士』、二〇一九年四月二日：〈https://ishin.biz/hokumenbusi/%E6%96%B0%E3%81%9F%E3%81%AA%E5%A4%A9%E7%9A%87%E8%AA%95%E7%94%9F%E3%81%AB%E4%BC%B4%E3%81%86%E6%96%B0%E3%81%97%E3%81%84%E5%85%83%E5%8F%B7%E3%80%8C%E4%BB%A4%E5%92%8C%E3%80%8D%E3%81%8C%EF%BC%91%E6%97%A5〉

(38) 村田右富実『令和と万葉集』西日本出版社、二〇一九年、36頁。

(39) フォンリュブケ注（15）論文、9–10頁。

(40) 村田注（38）、80–82頁。

（テネシー大学助教授）